

昭和二十四年七月二十三日
昭和五十八年三月十五日
第三種郵便物認可
發行（毎月一回・十五日發行）

（通第四〇四号）

慈

光

第三十五卷 第三号

次

白杵祖山師法語……………(1)

真愚は智なり……………近角常観……………(2)

一枚起請文を仰いで(上)……………井上善右エ門……………(8)

慈光日誌抄……………西元宗助……………(10)

一道会の記(二)……………榊原徳草……………(14)

念仏詩抄……………木村無相……………(18)

信の旅の二つの気づき……………花田正夫……………(21)

白杵祖山師法語

○仏の住処

本来仏はいずこにましますか。仏の住処はどんな処であらうか。また百宝の蓮台とか、極楽世界とかいわれるは、何処であらうか。それこそ、

「まよいの衆生の心想のうちにいりたまえり」

と判然と明示されてある。蓮如上人も、

「弥陀の大悲のむねのうちに、かの常没の衆生みちみちたるといえること不審にさうろうと、福田寺もうしあげられ候。仰せに、仏心の蓮華はむねにこそひらくべければらにあるべきや。弥陀の身心の功德、法界衆生の、身のうち、このころのそこに、いりみつともあり、じかれれば、ただ、領解の心中をさしてのことなりと仰せそうらいき、ありがたきよし、そうろうなり」

と仰せられてあるは、遠く離れたところに、極楽があったり、仏がましましたりするのでなく、正しく私の身のうち、心のそこにこそ常在したまうのである。さればこの輪廻きわまりなき私の身中心底に、もとより満入したまう尊とさを自照せねばなりません。

真愚は智なり

今日は真愚は智なりという題を出しておきました。この題を出します時に深く感じましたので、それを言い願わすにどうも適当な言葉がないために私の考の上から思う通りの言葉を以て題といたしました。その後も常にこの事を思いまた今朝以来も次ぎぐと感すべき事に遭遇しまして益々感じを深くしました事であります。

我等は愚なる者である。然るにそれを知らずして唯自分は賢いと思っている。我々は真の愚者であるという事が知れた時、はじめて真の智者となるのである。一旦仏に向ては我等は真に愚なるものである。このことは私自身も常に思っているつもり、仏の境界は不可思議にして到底凡夫の浅薄なる心をもっては量ることができない、愚なるものである。法を信ずる上においては己は真に愚者であると知られたのが即ちこの光に接したものである。

信仰というは己の浅間しく愚なものである事を知り、仏智の高大なる事を仰いだ処。私も平日から云っており承知

○恒順衆生の願

大無量寿経に「純孝の子、父母を敬愛するが如し」

大涅槃経に「慈悲随逐すること犢子の如し」

同じく云く「世の救いは要求して然して後に得らる。如来は請うことなけれどもしかもために帰したまう。仏、

世間に随うこと犢子の如し。この故に大悲牛と名づくることを得る」

小犢子が親牛の後に随逐して行く如く、純真なる孝子が父母を慈愛恭敬する謙虚な態度を以て奉事する如く、仏陀は常に一切衆生を親とし師長として居らるという信嘗であります。

華嚴経に、「菩提は衆生に属す」

同じく云く「若し衆生なかりせば、一切の菩薩、終に無上正覚を成ずること能わず」

この華嚴経の文は、仏陀の「恒順衆生の願」と申して、仏陀は恒に衆生にしたがうものにして、衆生を自己にしたがえしむるものではない。国民の民族姓の総名（釈迦）をもつて、一個人の尊稱として仰がれるもの、即ち釈迦牟尼は、自ら仰がる以上に、自から孝子の父母に奉事する如く、小牛の親牛につき随う如く、大衆を合掌礼拝せられたのであります。

近 角 常 観

もしていると思つて歎異抄の味を多くの人にお話をし、又自からも喜んで居つたが、この間一つの場合に出遇つて深く感じました。その場合と申すのは、其人は身に一丁字なき愚者である。ところが其信仰と云つたら実に円満で、一身上の事についても、死ぬるという事についても、皆すべて高大なる大悲におまかせしてやつて居らる。その状態というものは、まず八面玲瓏ともいふべきものであらうか。其人は身こそ一文不知の愚者であるが、一向に念仏を稱えて喜ばしてもらい、甚だしく喜ばれる時などは、其人は腹がへらぬという事である。其人の云われるには、私はいたつて愚な者でありまして、どういう理がありますかすこしも存じませぬが、私は唯南無阿弥陀仏々々と稱えさせてもらうて喜びます。そして死なば必ず極楽へまいらせていただくものと嬉しう思つておりますと。実に円満な状態である。私が字でも少し読めするならば楽しみも一層多いことでありましょうが、私は文字というものはかつて

学んだ事もなく、何も存じません。わけはわかりませんが唯念仏をさしてもうて喜んで居ります、といわるのを聞いて私は其人の最も不幸な境遇にありながら、その安心の如何にも強いことに深くうたれました。

自分はこれまで何度も歎異抄を拝読し、ことに第二章の如きは聖人の信仰が顕われているありがたい、と云つて居たのに、其人の話を聞いてみると、到底その人程に云いあらわし得なかった。其人は念仏という字も知らぬのである。「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよきひとの仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり」この言葉を私は何返これまでに云うたか知れませんが、私の言い方は未だ二重にも三重にも文をつつやをつけておりました。この文の中では殊に信ずるという処が力があるとかいつて自分も力癪をいれ、唯仏は大なる慈悲だとか、力だとか何だとか、或は念仏は広大不思議の力だとか何とか、かんとかというて居た。それが偽りと云うのではないが、實際其人の様に有難くは云えなかった。其人が、私は何も知らぬ、わけもわからぬが、能くわかつたらさぞ面白いだろうと思います。然し今はわからぬけれど稱えては喜ばしてもらうといわれたのは全くここである。「よき人の仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり。念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはべるらん、ま

く真に喜ばるる姿を見て、私は、いかにも愚者こそ真に智者であると感じました。信仰の上から云えば、愚者だ、愚者ほどよい。

その後も私が出遇す事柄がみなこの事を証明せざるものはない。その一つは明日も話すつもりであるが、先日一人のひとが私の宅へ来られた。これは近頃刑務所から出られた人であります。この人の如きも、社会に居る時、かれこれ智恵を振りまわされたために入所することとなつたのである。ところが今度いよく出所する様になつて考へらるるには、ア、おのれは是迄申しわけのない事をして居つた。今からいよく家へ帰るのであるが、どうも帰りにくい、いやしかしどんな身となつていたにせよ、子が親のもとに帰るといふことはさしつかへはない。かつて教誨をうけたように、ただ帰ればよいのでないかと考へた。出所の時には親類の迎へも受けて、其時には入所してから得た信仰の模様なども話した。さてそれからいよく家の門口まで来たところが、種々のおもいが忽ち湧き出てどうしても入れぬ。自分はすべての人々に対して済まぬ。仕方がないでしょうかと思つて居る時に考へつたのは、自分はこの後家を離れて生活すればよいのである。そうすればこう苦しいのに強いて家に入らぬでもよいではないかと思つて、忽ち踵を廻らして停車場へ引きかえした。そこでかつて聞

た地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然聖人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからずそうろう」どうも度々読んで、人に話をしながら其人だけえの有難味を言ひあらわす事ができなかった。

「念仏は浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり」とは信仰の強い言葉じやと云いながら、心には存知せりというふうな風であつた。

念仏は結局陀羅尼と同じである、地獄におつる業にてやはんべるらんとは全く仏にまかせた形だと、かれこれと云うていたのは、存知して居た様だが、本当に存知せぬのじや。然るに其人は、私は何も存知せぬと云うていて、然も能く存知して居らる。それには私もえらくうたれた。愚者は智慧じや。少し学問すると小智慧が出来から、解ることもわからぬ様になる。文学でも少し読めると、我はかように味うて居るとか、誰の実験はどうだ、誰の経験はこうだ、かれがとか、これがとか、おのれがと云うが、必ずしも当つては居らぬ。

とにかく、ひとかど知つたように云うが、ただ少し字義の解釈くらいを知つたのじや。仏は知つてから信ぜられるのではない。其人が何も知らぬというて、彼是いうことな

いたことを思い出して、とにかく入れというので入つた。ところが実に不思議である。親類の人等も集つて、一刻々々何故早く帰らぬかと待ちに待つて居てくれたのであつた。ア、こういう事はかねて聞いては居たが、か程とは思わなかつた。実に今迄自分は如何に兄を苦しめたかという事を思うと、どうして詫びをしてよいやらと一向氣をもんで居たので、家の前まで實際来て居りながら、入る勇氣が出なかつた。然るに思いきつて入つて見れば、実に意外で、かつてこんな者を迎えてくれたのには私は非常に感じましたと話された。

私もまた此人の話を聞いて自分が云うて聞かせた事を、事実の上に見ることを得て深く感じました。本当に我々ばかりと聞いて感じた事を、あとで彼是と計らいを入れては苦しむ様な事が多い。我等は愚者だ。実にこの事実の如く戸外に立ちて、彼はおもうて居るのである。これを思えば我がはからいをうち捨てて真に己は愚なりという事を知つたが真実仏の真智を知つたのである。

又、或人の如きは人を怨み、人を憤り種々と二年間も苦しんだ。最後には妻を疑い、味方をも疑つたが、これ全く何事も自分の疑いという心が本となつて、かく間違ひを生じたのであるという事を知つて遂に信仰の人となつた。とにかく、あ、じゃこうじやと己の方で種々におもひを

めぐらして居るのが、仏の方では我々の落着くべき先はちやんと御存じである。我々は理論的には知らぬが、この世の事は、すべて仏の方から見られては、成るべき様、行くべき道、一切がごとく出来てあるのである。そこでそうして苦しんだ経験のある人が言われるのを聞けば、信仰のない人には解らぬけれど、この世程微妙なところはない何故にこのようなところに居りながらこの事が知れなかつたかというて喜ばれる。前に話した人の如きは、自分の妻が自分に忠実にして居るのに、それをかえって疑って居つたために、世間がそれが源となつて厭うべきものとなつたのであるが、一度その疑であつた事を知られて後は、全く世間の見方が一変して、最も喜ぶべきものとなつた。くわしくは言えぬが、要するに、我々のはからいで種々に苦しみ争いをする、それがためにどうしても眞の智慧に入るこゝとが出来ぬ。如來智慧海は深底にして無涯底であるのに、我々が寸法を入れているのは間違ひである。

どうしても己の考えは間違ひ、仏の方こそ間違ひがない、度々云う通りこうやって會つて話す一時間もみな智慧海の中に引き入れられて居るのである。それに我れ知つた顔に話すのはよくない。仏の広大な力は強い、私はその点よりいへば、今日も一人の人が云われるのを聞いて喜んだ。かの朝に道を聞けば夕に死すとも可なり、という味を此人

かつて西有穆山師の処へ或人が行つて、宇宙と我とは一体と思つて居るがどうですかと問うと、穆山師は答えて云わるるに善くない。その思うと云うことが善くないといわれたという事であるが、実に最も善である。世間の人の信仰は思つてこしらえて居る。それではいかぬ。こうであるとか、ああであるとか、解つたとか何とか言うことをやめて、自己の一切を挙げて仏に托し、我は眞の愚者であるという処にいたらねば仏智の広大なことは知れぬ。そこで自分のことを愚者と云われた味がありがたい。

私もはじめは、愚禿というは、唯謙遜の語とのみ思つて居つた。そう云へばそうじゃが、その自覚は、己は何も解らぬ、行もおよばず、力もないと知れたところである。愚禿は涅槃經の中に破戒の人を禿というところである。聖人は謙遜ではない、全く眞愚のところである。然し眞愚なる人は少ないもので、少し文字でも読む人は、「一文不通のやからの念仏申すにあうて、汝は誓願不思議を信じて念仏申すか、また名号不思議を信ずるか」と云い驚かして、二つの不思議の子細をも分明に云ひひらかずして、人の心をまどわすこと、此条かえずくも心をとどめておもいおくべき事なり」と聖人は誡められた。次の章には「また經釈を読み学せざる輩、往生不定のこと、此条すこぶる不足言の義と云いつべし。他力眞実のむねをあかせる諸の聖教は、本願を信じ

によつて充分味う事が出来た。こういう人に対しては、少しも力を入れて話さずとも、自然に恢廓広大の思いに住し実に心持がよい。

然るに人に対して妙な障壁を置けばおく丈け話が自由に出来ない。仏の話をするのもそうである。仏に対して我々のはからいをいれるのは無限のものに限りをつけて蓋をしたようなもので、もうそうすれば人間の智慧だ。かく仏智に蓋をしたのが人間の知慧、おのれの指金で仏をはかるのが人間の智慧である。ただ信ずる外に別の子細なきなりという眞愚なる骨目に、理屈や推理をつけてやつて居ることが多い。こう云うてくると最早言葉が尽きてしまつて何ともいふことが出来ぬが、とにかく我々の智慧や理屈やはからいて考へて居る間は、仏智の不思議を知ることとは出来ぬ。全体仏を知るなどということがすではからいじや。

こう云うてくると何ともいふ事が出来ぬ。然しなお信仰問題について云へば、現今この問題について一つ渡り難い点は、仏は必ず善くして下さると思つて居るという、思うというが人間のはからい、意地悪く云へば、こういう思いのものには不安がある。現今では、こう思つて居る。信じている、考へている、という如き、存外信仰的の言葉がかへつておおわれている。仏よりよくして下さると聞くと、そう思わねばならぬのかと思う人がある、それはよくない。

念仏申さば仏になる、その外何の学問かは往生の要なるべきや」と云われてある。歎異抄を読みながらいまだ種々と理屈をつけて居つた。一文不通の愚者というがあり難い。

私の従弟が三年も軍隊生活をやつて帰つてから、仏前に参り、私の如き者は伝道も出来ず、申しわけのない者だと思つて、御文を拝読するうちに、かの、それ八万の法蔵を知るといふとも、後世を知らざる人を愚者とし、後世を知るをもつて智者とすといへり、とあるのを讀むで大いに感じた。もとよりこの従弟はあまり學問をすることができなかった。しかるに己の眞の愚者なるを知り、仏智の広大なるを喜ぶにいたりました。実にこの御文のお言葉の如く、イロハも知らぬ愚者といへども信仰の人は眞の智者である。世の如何なる智者といへども我がはからいを廻らして彼是として居る間は、到底仏の眞智に接することは出来ぬ、絶対の安心は得られぬ。世の外交、政治、教育、なんでも不思議の仏智に安住して行けばよいが、そうでなくして己の方面より割出してやつて行く時は、如何なる時でも必ず甲論乙駁きわまる処がない。而して仏智に安住してやつて行く時には結果を見ぬ。結果のみに走るから甲論すれば乙破るといふ風になる。

然らば結果を見れば結局どうなるかというとな実に不思議である。結果を見ないけれどもそれが歴々と事實になつ

て顕われてくる。而して信者の信は、法華經の、火焼く能わす、水溺らす能わすといふは事実である。然し、このために信ずるといえば人間のはからいというものである。人間のはからいがすべて絶えた時あらわなるが即ち仏智である。仏の智慧は我々が小なる智慧を捨ててすべて仏にまかせる処にはじめて生ずるのである。私は幸に日々新しい信者に遇わして貰うて益々この味を知らして頂いて居る。

現世利益の御和讃に、

阿弥陀如来化して、息災延命のためにとて

金光明の寿量品、ときおきたまえるみのりなり

一切の功德にすぐれたる南無阿弥陀を稱うれば

三世の重障みなながら 必ず転じて輕微なり

このように、信仰の人は期せずといえども、おのずからこの利益があるという意味である。かくの如くにして人生の複雑なる間に処して行くのである。

要するに信仰というものは、まったく、親鸞におきては唯念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり、という処であつて、己の力で何事も皆知り尽して信するにあらず、一向己の愚なる事を知りて仏にすがる処が最も味のある処である。充分に話すことが出来なかつたが、とにかく我れ考えたり、心得たり、という考の起つた時に最も吾人の警戒を

一枚起請文を仰いで

(上)

親鸞聖人の教えに生かされる私どもにとつて、聖人のいのちの師源空法然上人の信心が、「一枚起請文」の一紙に認め残されているのは何とも有難い事であります。法然上人の『選択集』はもとより大切根本聖教であります。この「一枚起請文」と表裏して拝読するときに、その元意を顕かせていただくことが出来るのであり、親鸞聖人が「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよき人の仰せをかうぶりに信するほかに別の子細なきなり」とまうされたのも、「一枚起請文」を貫く祖意をいただかれて、自ずとほとばしった御言葉と仰ぐことが出来るのです。

「一枚起請文」とは言うまでもなく、一枚の紙に書かれた起請文ということですが、起請の請という字には本来、「長上に謁見して申上ぐる」との意があり、従つて起請は起誓と同義であつて、今は釈迦弥陀の二尊に対して誓言を申上げるといふ意味であります。この「一枚起請文」は上人が示寂される数日前に門弟の懇請に応じて草されたもので

せねばならぬ。何事のおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる、この味が要点である。窮りなき仏智をば疑い多い世俗の智慧をもつてはからいを入れ易い。聖人の仰せには、わが善きことを為し得るといふ間は不了仏智の人だと仰せられた。どうかして吾人は小智を捨てて疑惑を離れ、廓然広潤なる仏の大智慧を仰いで、真愚なることを知らして貰い、わがはからいを打ち捨てて御慈悲を喜ばして貰うが、真愚の智なる所以である。

—「求道」第二卷第九号—

ゲエテの言葉

著者が読者の利益をはかるように注意するならば、読者が望んでいるものを書かずに、著者自身が自分にも読者にも修養の足しになるものとして其時代に最も適切で必要だと考えるものを書くのが一番好い。

誤謬は絶えず繰返して世に行われている。その故に、人は飽くことなく真理を繰返して述べねばならぬ。

井上 善右エ門

すが、本書には二本が伝わっていて、その一つには本文の次に別行として「為証以 両手 印」とあり、つづいて「浄土宗の安心起行此一紙に至極せり、源空が所存この外に全く別義を存せず、滅後の邪義をふせがが為めに所存を記し畢んぬ。建暦二年正月二十三日、源空在判」と附記が添えられています。「法然上人全集」所収の一本には以上の誓言の記がありません。「和語灯録」所載のここに「滅後の邪義をふせがが為め」とあるのをみると、当時すでに、上人のお心に背くような説をなすものがあつたことが想像されるのでして、その意味において、真実の信が如何に深くして誤ちをおかしやすいものであるかと思われるのです。しかしそう言うとき、信が深遠で容易に達しがたいものであるかのように感じるなら、それもまた誤ちであります。

『大無量寿經』に「若し斯の經を聞きて信樂を受持せんは、難中の難、此の難に過ぎたるはなし」と誠められてあるのは、われわれの迷執の情性が如何に執拗なものであるかと

いうことを示されているのであって、法の難信であるということではありません。難は法の上にあるのではなく、私ども機の側にあるのです。この事を説き誡められる世尊のお言葉には涙が宿っています。それはそのまま南無阿弥陀仏と私どもに呼びかけておられる大御親阿弥陀仏の御涙であります。であればこそ私どもは聞法にいそしまねばなりません。それは難信の法に挑むのではなく、私どもの迷執の底を照していただくためです。迷執を破るのではなく、迷執を如実に気づかせていただくところに、法の光がこの私にいたりといて下さいます。この光に撰取される外に迷執を越えるべき道はありません。聞法とは大悲の光に照育されることです。その光が南無阿弥陀仏と一つになって、この私に現に只今廻施されているのであります。

「一枚起請文」の最初は、

もろこし我が朝にもろもろの智者達の沙汰し申される観念の念にもあらず、また学文して念のこころを悟りて申す念仏にもあらず、

という言葉に始まっています。その意は、念仏往生の念仏というのは、中国や日本で多くの智者学者達が説かれる観念の念なのではない。その観とは総じていえば、心を澄し統一して真如や仏身を觀察（心に明確に思い浮べて一体と

慈光日誌抄

— 幻の原稿・学生親鸞会のことなど —

西 元 宗 助

ごめんください。だいぶん、ボケてきたようでごさいます。昨年十一月末に、この「慈光」誌の拙稿、私宅の近所のポストに入れたつもりでおりましたのに、それが慈光社、花田先生のもとに届いておらず、しかもその原稿の下書は、年末に処分してしまっておりましたため、今さら、どうにもなりません。そのことに気づいたのは、これもウカツなことで、正月に入ってからのことでありました。

それはそれとして、この幻の拙稿は——縁深く——と題するもので、旧年十一月六日（土）北陸鯖江市にある真宗十派のひとつ——誠照寺派本山（末寺数約七十）の境内にある願生寺の住職継職法要の記念講話のため参指することから書きはじめたのでした。

願生寺の前住職の長田智龍師は、あとで述べるように学生時代からの友人で、しかもあとを継がれた令息の智拙さ

なること）することですが、その観が阿弥陀仏に向うて観想憶持することになれば、これを観念念仏と言います。『観無量寿經』を表面的にこの観のこころをもって読めば、その定善十三観はまさしく観念念仏の作法や行相、それによつて成就する功德や減罪を説かれてあると思われまますから、聖道の学者達がかかる観念の念仏を力説唱導されたのは当然です。

法然上人も親鸞聖人も、かつて叡山で修行の時代、この観念の成就に専念されたことでしょう。『歎徳文』に「定水を凝すといえども識浪しきりに起り、心月を観ずといえども妄雲猶覆ふ、しかるに一息追がざれば千載に長く往く」とあるのはそのときの苦闘を如実に語られている言葉です。また次に「学文をして……」とは、古来の学匠の研鑽された跡をたどり、道理を追究し、仏を念ずることがどのような理由と根據から解脱をうる道となるかを十分に理解し、その法理を理解し得た力を以て念仏し、功德を期するような念仏をいうのです。いま法然上人は、自分のいう念仏とはそのような観念の念仏でもなく、また念の道理を悟って申す念仏でもないと言言されているのです。（つづく）

んは（高校教師）、わが無相さんと縁の深い方とのことで、それだけに私は喜んで出かけたことでした。それに無相さんも武生の和上苑（特別養護老人ホーム）を抜けだして会いにきてくださるとの連絡。わたしは胸をわくわくさせながら、歓びいさんで北陸線の「雷鳥」に乗車。

ところで心臓発作のすぐおきる無相翁——みずから「半盲」「半呆」と名乗りたもう無相さんの外出はやはり御無理ではなかったか、とあやぶみ案じながら、おずおず鯖江駅に降りたところ、なんと無相さん、満面に笑みを浮かべ、改札口から身体を乗り出して、さかんに手を振ってござりました。

もう八十歳になられるか、いや厳密に云えばこの二月二十日で満七十九の誕生日を迎えなさる無相翁と抱き合うようにして挨拶。それから翁はコトコトと杖をつきつつ、この私を駅の下階の小食堂に案内してくださったのである。

さて他のお客の一人もないお昼の食堂で何をしゃべりあったか、その時から既に二ヶ月もたった今は、あまり覚えていませんが、ともかく無相さん、ニコツと会心の笑みをたたえておられた。それはお浄土の住人のようで、思わず私もニコツとしました。そしてまた、ひとしきりお喋りをはじめ、それが一段落すると、どちらからともなくナンマンドブツと、それこそはればれと、そして沁み沁みと申したことであります。

なおお昼食をともにしたのでありますが、なにを食べたのか、今となつては、さつぱり記憶がございません。多分うどんだつたと思います。やがて迎えのクルマがくるころと、代金を支払おうとすると、係りの小母さん、お代はもう、このお爺さんから沢山、いただいています、という。これには全くまいりました。

やがて願生寺の令息ご住職に迎えられて寺についても無相さんとの話は、ご信心のことですきませんでした。そして御身上のお話も。しかし無相さん、だいぶん疲れのよう、それに午後の行事もせまりましたので、名残りを惜しみながら住職がクルマで送って下さいました。

さて継職披露法要は、二条ご門主親修のもと、おごそかに執り行われました。智龍さんはいよいよ老院と呼ばれる身になられたのですが、誠照寺派では教学の中心、著作の父君）や甚野諦観師らのことに芳談が及び、これらの方々のすでに故人となられたことを承って哀悼する。

○ ○ ○ 学生親鸞会のこと。

これをお読み下さいます皆様がた。なんのこともない日誌、しかも昨年十一月の行方不明となつた日誌のこと、申訳もございません。しかし、これは当時の関係者にとりましては案外、感慨の深いものがあるかと存じます。それといますのも、これらのすべてが私共の学生時代の、主として、昭和四年から昭和六年頃までの「学生親鸞会」（ただ今の高森親鸞会とは全く関係なし）という学生の信仰団体とその運動と深い関連―因縁があるからでございます。

この団体は、最初の本願寺派の熱烈なる布道家・横田慶哉（元軍人、発心して得度。京都府下八幡町善照寺・入寺。昭和十二年没五十七才）を中心とし、まもなく大谷大学教授・池山栄吉先生（ドイツ語担当、近角常観師の親友、昭和十三年十一月没、六十六歳）を師と仰いだ学生の信仰団体で、範囲は京大・龍大・谷大・そして東山の女子専門学校（京都女子大学）や奈良女子高等師範の学生にまで及んだ。その学生仲間では当時、京大文学部哲学科専攻の一学生であつた花田正夫先輩（岡山医科大学中退、旧制六高在学時代に池山栄吉教授の教化をうく）を中心として活発に聞法し伝道し、そのため殆んど日曜こ

は『救いの発見』（百華苑刊）や詩集などがおありである。

○ ○ ○
ついで十一月二十一日（日）には、宝塚市雲雀丘での、『ひばりが丘・宗教文化講座』の最後の講座に出席、講話させていただく。

この会は、親鸞聖人銅像を何百体（？）と国内はもちろん北米各地の仏教会にも寄贈なさつたことで有名な広瀬精一翁（かつて大阪の鉄工商として巨財をつくる）の懇志により、昭和三十年頃から始められたもの。一般市民の参加を願ひ、宝塚市の協賛をえるために、会の名称も宗教文化講座とし、会場も市の施設を利用し、講師は広瀬翁と因縁の深い桐溪順忍、宮地廓慧の両勸学をはじめ、川畑愛義、東昇（昨年逝去）の両兄ならびに私などが招かれた。

しかし二百回ちかくもつづいたこの会も、広瀬翁が三年前に亡くなり、協力者の竹村翁（もと東洋紡績社長のこと）も老齢で入院ということもあつて、ついにこのたび解散となつた。まことに感無量。この日の聴衆は広瀬・竹村両家の方々はじめ約六十名余。

ついで月末の二十七日（土）には、奈良市浄教寺（鳥田和磨住職）のお招きによつて、会館・報恩講でお話をさせていただき、ひさびさ老院の島田義昭氏と昔の学生親鸞会時代のことを話しあい、西本誠哉師（龍谷大学の石田慶和教授

とに集会をもつた。

ところでそのときの財政的援助者のお一人が前記の広瀬精一氏。長田智龍や宮地廓慧の両兄らは龍大の学生。これも前出の川畑愛義と東昇の両兄（従兄弟の間柄、ともに京大名譽教授）は当時京大医学部の学生。そして田村実造（元京都女子大学長）と松本解雄（愛媛大学の名誉教授・没）の両兄や私たちは文学部の学生であつて、また京大仏教青年会の会員でもあつた。

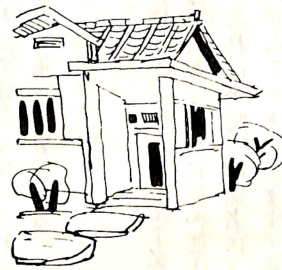
なを当時の親鸞会の仲間には、すこしおくれれて榊原徳草師（臨済宗専門学校卒、浄住寺住職）や大谷大学のフランス語担当の信国・淳教授（故人）なども参加。そして前出の奈良の浄教寺は、そのころの奈良における信仰運動の拠点。京都は当時、下鴨にあつた知四明寮（寮司は、京都大学・羽溪了諦教授）がたまたま私共がその寮生であつたため、その運動の実質上の本部であつた。

しかし、すべての運動には行き過ぎもあり、弊害も伴う。昭和五年七月、知四明寮は閉鎖、寮生は分散し、一部は、「聖鸞寮」を開設し、他の一部は後述するように「学道舎」をつくる。

ここに学生親鸞会は転機を迎え、前述のように聞法の団体となつていくのであるが、今はそのことを叙述する余裕がない。ただ私の所属した学道舎についていえば、わたし

たちは学生の身、どうしても学道にうちこまなければならぬと、川畑愛義、宮地廓慧、長谷顕性（現在富山県井波市光岸寺住職）の三兄と私は、昭和五年秋、鹿ヶ谷・浄土寺に一軒の家を借りて「学道舎」の看板をか、げて自炊し、月に二回、日曜日に信仰講話を、この学道舎の二階で開催したことを附言しておく。

なおこの学道舎から五百メートル離れた鹿ヶ谷疎水のほとりに、ほとんど全く時を同じうして、当時大谷大学を辞任された曾我量深、金子大栄両先生を師と仰ぐ安田理深、松原祐善の諸兄らが「興法学園」を開設しておられ、ここに両者は接触交流をはじめ、ことに私は非常な教化をこうむるのである。が、残念ながら、今日はここでペンをおくととする。 二月六日



一道会の記(二)

次ぎは、西元宗助先生のお話がありました。お話は左の通りでありました。

本来なら花田先生のお話を承る慣例になっております。又そのために皆様もお参りになられたのじゃないかと思えます。先程承りますと昨晚病院をお退院と承っております。私はこの春から慈光誌が二月号は出たけれども三月号はと、三月号は出たけれども四月号はと、こう思ってます。

それからこの一道会という集いも、榊原先生今春八十三才と承りました、もうあと何年続くかと、イヤ本当にそう思うて居ります。慈光誌もあと五年は無理ではないか、一道会もあと五年は無理です。徳草先生が娑婆に居られなくなるという意味ではありません、一期一会という感は非常に強く感じます。ナンマンダブツ、ナンマンダブツ。

私も今日は天気もよく、親しい学生諸君と一緒に参らせていただきました。己れの信心大丈夫かなと、ナンマンダ

新刊書紹介

井上 善石工門 記

このたび、西元宗助兄が『人間が人間になるために』

という好著を上梓して下さいました。活字も体裁も内容も、まことに読みやすく出来ていまして、読みかけると、一気に読みつづけてしまいます。

四章にわかれ、第一章は、幼稚園の親御さんたちに月々書かれたものの集録。

第二章と第三章は「人間が人間になるために」という本題の内容でありまして、真宗の功德（徳益）と、三願転入がその骨子です。ここに兄の信体験がつぶさに録されています。

第四章には、随感三篇が収められています。

西元先生という方の人柄がそのまま本になったような書物です。一七〇頁。御閲読をおすすめます。

出版社 京都市下京区七条通西洞院西入ル。

探究社

定価 一三〇〇円。送料、二五〇円。

振替 京都二一八五番。

榊原徳草

ブツ。お蔭さまでと。願れば恥ずかしゆうございますが、じやお前の信心どこからきたかと。私はあのオ一翁の歌

わたしや あなたに拝まれて

たすかつてくれとたのまれて

御恩うれしや ナムアミダブツ

あなたとは誰か、仏様でございます。そこに第十七願の諸仏稱名という願のもつ深い意味がございます。本日徳草先生が歎異抄を涙をもってお読みいただき拝聴したわけでございます。あの中に「幸いに有縁の知識によらずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや」とありますが、これは、歎異抄第二章の中に「親鸞におきては、唯念仏して弥陀にたすけられまいらずべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり」と、よき人にお遭い申すことをもって、「わたしやあなたにおがまれて」と知らせて頂くのであります。

私においては、あなたは釈尊、七高僧、親鸞聖人。私自

身においては、個人的なことになりますが、私の母方に非常に篤信な徳川時代末期以来の所謂「かくれ念仏」のお爺さんが居りました。是非聴いてくれと。又形は変りますが、私は母から拝まれて参りました、足利浄円先生からも拝まれてまいりました。それから御縁を通じて池山栄吉先生、或は金子大栄先生、それから花田先生、榊原先生、会い難い先生にあわせていただきました。

そこで一つ思うことがございます。「幸いに有縁の知識によらずんば」は、各自の宿業がございまして、だから各自は各自の有縁の知識、この場合におきまして私は教育学、すべて仏法を稽古ごとと一緒にするわけにまいりませんが、一番大事なことは、全身全霊を傾けて、この先生は、という先生にあうことであります。これはピアノの稽古でもそうであります。本当に信頼がおける先生、これだと思う先生、もう一つ注意することは、あの先生のよいところは、先生も人間ですから色々癖を持っております。ですからこの先生のよいところ、「親鸞においては、唯念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの云々」自分にとってこの先生に就いてという、このことが大事。そしてそこにおいて信心というものが身についてどうなるか、それが一切の人々に頭がさがる道があたえられてくる。吾等は心得違いをしました、自分にとって絶対の先生、外の先生

なり」さらに、「いそぎ、浄土へまいりたくそうらわんには、煩惱のなきやらんとあやしきそうらいなまし」

以上によって、人間に在ってはすくうことはできない、仏になつてはじめて救うことができる。人間の立場で如何に平和運動をやっても、核反対運動をやっても出来ない。第四章に「聖道浄土の慈悲」のことが出ています。「聖道の慈悲」というのは、ものをあわれみかなしみはぐくむなり、しかれども思うがごとくたすけとぐることを極めてあり難し」と。如何にしたら人々は救われてゆくか、このことは法然上人のお書きになつた選択本願念仏集ではつきりするのじやないかと思ひます。法然上人には、いそぎ、ということとは、非常に少い。そのことを一言申上げて、特に第五章に、「親鸞父母孝養のためにと一返にても念仏申したること、いまだそうらわす」このお言葉は重大であります。なぜか、「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり」現代的にこれを申せば、親鸞は国のために戦死した父母兄弟のために、一返も念仏申したことはない」となります。私がそのことを痛感しましたことは、アメリカのシヤトルにおきまして、丁度五月三十日でありました。この日はアメリカでは戦没者の追悼会の日であります。アメリカの人々のために戦死した人々のための追悼会であります。この時はキリスト教、ユダヤ教、仏教、あちらは信教自由の国ですか

は粗末にする、会える方には頭がさがる。例えば暁鳥先生の弟子であるから他の先生はくだらんと、これは根本的な誤りであります。私は足利浄円先生を心から仰いで居ります、そのお蔭さまで池山栄吉先生、そして先生によきひとを見出した榊原先生、心から尊敬申しあげる、こういうことを申しあげたことであります。

最近、私は歎異抄と御縁が深くございまして、拝読いたしておりますが、歎異抄全体において注目すべきことは、「急ぎ」と云う文字であります。第四章には「慈悲に聖道浄土のかわりめあり、聖道の慈悲というは、ものをあわれみはぐくみかなしむなり。しかれどもおもうがごとくたすけとぐることを極めてありがたし」と、その次に「浄土の慈悲というは、念仏していそぎ仏になりて、思うがごとく衆生を利益するをいふべきなり」。第五章には「ただ自分をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだいずれの業苦に沈めりとも、神通方便をもつてまず有縁を度すべきなり」と、ここにもいそぎがあります。また形は変わりますが、第九章にもいそぎが出ております。「念仏もうし候えども、踊躍歡喜のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのそうらわぬは……」また「いそぎ、浄土へまいりたきころのなくて」、「いそぎ、まいりたきころなき者をことにあわれみたまう

ら、キリスト教だけではありません。その時に私に一場の講演をするように言われました。なぜ私が呼ばれたか、日系のアメリカ人三十一名が戦死しております。日系人はどの国と戦つたか、日本とであります。沖繩で、フィリピンで。その遺族の方々は本当に切なく悲しいことです。自分の息子達は祖国に弓を引いたのです、靖国神社へも祭られませんが、息子はどこへ行くんでしよう。それで浄土でと、どこの国々も超えてお浄土を切に念じたことはありません。そのとき「親鸞は自分の国のためとていまだ一返も念仏申したこと候わす」「そのゆえは一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり」地上においてこそ敵味方、お浄土においては恩讐の彼方、皆が永遠の平和を願つて立ちあがつている世界であると。それを明かにするために私はソビエットロシアのシベリヤに居た時のことを申しました。シベリヤのテルカブルスクに行った時のことです。シベリヤ地帯の人々の中には、私に食つてかかる人が居ました。自分の父は、兄弟は日本兵に殺されていると、これは大正時代に日本がシベリヤに出兵した時のことを言うのでした。日本兵に殺されたロシア兵の居ることは事実なのです。地上においては憎みあひます、お浄土でしか救われる道はありません。「いそぎ、浄土のさとりをひらきなば」この言葉が切実に思われることであります。

従って歎異抄第九章の「念仏申し候えども踊躍歡喜のころおろそかに候こと」「いそぎ、浄土へ参りたきころの候わぬは」早く自分が浄土にまいたくないだけじゃない、個人のことでしかか、って居れない、本当に救われてゆく道、第四章、五章にありますね。「浄土の慈悲というは、いそぎ、仏になりて、大慈大悲をもておもうがごとく衆生を利益するをいふべきなり」、「ただ自力を捨てていそぎとりをひらきなば、六道四生のあいだ、いずれの業苦に沈めりとも、神通方便をもて、まず有縁を度すべきなり」と、これは自分が大信心をいだいて居ないではないか、というこゝろが含まれているのではないかと思われるのであります。

もう一言、今から十何年前ですが、井上先生とNHKでお話をしたあとで、四十通ばかりハガキを頂きました。子供達はこんな沢山ハガキが来たと喜んでいました。私も嬉しかったのです。すると子供等の云うのに、お父さんの話に感謝したんじゃありません、仏様のお話に感謝されたんです。大体、話す方より、聞く人の方が尊くします。うちの子供の言葉を有難く思います。このように遠くはるかに沢山のお方達に来ていただいてお聞き下さった本当に有難く、花田先生のお氣持を思いながら申し上げます。

念仏詩抄

念仏詩・歎異抄「ただ念仏」を中心に——(三)

歎異抄・第九条

聖人のお言葉

第九条に——

「喜ぶべき心をおさえて喜ばせざるは

煩惱しやうぶの所為なり——

いささか所勞しやうらうのこともあれば

死なんずるやらんと心細くおぼゆることも

煩惱の所為なり——

ああ

煩惱の所為なり——

煩惱の所為なり——

かかる煩惱の身を殊ことごとにあわれみたまいて

この身のままに ただ念仏の身たらしめ

た。

それからまた私の親しかった東昇氏が遂にこの世を去つて、お浄土にかえられました。本当に段々と少くなってきましたね。今度、文化功勞賞を受けられた西谷敬治先生、今年は金子大栄師の七回忌でした、十月二十日でした。その前に西谷先生にお目にかかったとき西谷さんの仰しやるんです。金子先生が逝かれるし、あと誰が逝くかなあ、安田理深師でしょうね。お西の僧籍では花田先生でしょうね。そうしたら西谷さんが二人共在家出じやないかと。そこで申しました、お釈迦様も親鸞聖人も元は在家でしょう、寺に生れて僧になるのは変則ですよ。安田師も花田師も在家から僧籍に入られた。我々は念仏申して立ちあがって行くこゝろではありませんかと申したことであります。ありがとうございます。ナムアミダブツ、ナムアミダブツ。

以下次号に——



木村無相

かの土どにして必ず覺さらしめずば止まぬとの願とは——

ああ

大悲大願の たのもしきことよ

ただ念仏の この身の幸さいよ——

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

歎異抄・第十条

聖人のお言葉

第十条に——

「念仏は無義をもて義とす

不可稱・不可説・不可思議のゆえにと

おおせそつらいき——”

ああ

ただ念仏こそ 無義の念仏——

オノズカラにして 計らい無く

オノズカラにして 自他を化し

オノズカラにして 報土に生ると——

正に不可稱・不可説にして

不可思議というほかはなし——

ただ念仏こそ 無義の念仏——

ああ

ただ念仏こそ 無義の念仏——

ハカライの有無 正否のわかれ目——

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

歎異抄・結文(一)

聖人のお言葉

歎異抄の結文に——

“弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば

“煩惱具足の凡夫

火宅無常の世界は

よろづのこと・みなもて

そらごと・たわごと

まことあることなきに

ただ念仏のみぞ

まことにておわします——”

ああ

ただ念仏のみぞ

マコトにておわします——

ただ念仏は よろづのこと・みなもて

意味あらしめる 転成の智慧——

ああ

ただ念仏は 転成の智慧——

智慧の念仏 智慧の念仏——

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

おわりに

歎異抄

ひとえに親鸞一人がためなり、
さればそくばくの業をもちける身に
ありけるを

たすけんとおぼしめしたちける本願の
かたじけなさよ——”

ああ

助けんとおぼしめしたちける

大悲の本願

われにあらわれ ただ念仏——

ただ念仏のかたじけなさよ——

ああ

ただ念仏のかたじけなさよ——

大悲大願のかたじけなさよ——

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

歎異抄・結文(二)

聖人のお言葉

さらに結文に——

歎異抄

ああ

歎異抄

歎異抄

歎異抄こそ わたしの聖典——

・ああ歎異抄拝読六十一年

七十八の今日にして

残りしものは ただ念仏——

わが生き死にの道はただ

ただ念仏の ひとすじ道——

ただ念仏は わたしの白道——

ただ念仏は わたしのイノチ——

ああ

歎異抄こそ イノチの聖典——

歎異抄こそ わたしの聖典——

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

(おわり)

信の旅の二つの気付

花 田 正 夫

私が心筋障害で、ヒビの入った茶碗も大切にすれば永持できるからと診断され、外の仕事をお断りして、静養していた時、近角常音先生がわざわざお見舞下さった。その時、何か生涯の教えとなりますことを書いて下さいと申上げた時、短冊に、

常観言。またやりそこない／＼それだからお呆れない

お慈悲でないか 常音記

と書いて下さった。そして次のようにお話し下さった。

「兄（常観先生）が信心ひとつで立派にやっているの自分も信心を得たら立派になれると思って、兄の話をきいていたが、その間違ひは早く気づいたが、信心が定まらぬのでとおいつして三十近くになった。もう自分は生涯信心は得られぬと自分で心を閉じていた。それでも日曜講話は聞いていた。そうした或日、兄嫁から、常音さん／＼。兄さんはいつも、弟をわが子のように思っているが、そのことについては不足はないけれど、あ

たと気づき、この私の全体を見てとって可愛想なものじやと云ってくれていたのかと、心もくだけてきた。

その後、兄から「常音お前は最近えらい嬉しそうではないか、何か気づいたのか？」と聞かれ、事の次第をそのまま打ち明けると非常に喜んでくれ、これからは日曜講話の前席をせよと云ってくれた。

ところが信者の人々は自分の話を喜んで聞いてくれるが、家内が一向にわかってくれぬので、お前もしっかり聞けと云うと、これ以上一生懸命にどうしたらなれますかと反抗するようになり、家庭が暗くなった。又浅草の本願寺別院に用事で出掛けても、信のない坊さんばかりと高挙りして、われ心得顔になり、相手の方も、何だ自分ばかりが信心があると慢心して、と反駁して和合出来ぬようになった。そこで、自分のような駄目な奴は、兄と一緒にでは邪魔になるから、何処か町はずれで玩具屋をして暮そうと決心し、思いつめてそのことを兄に申出た。

すると兄は、何だそんなことを考えていたのか、と云って、「わかったと云ってはまたやりそこない、またやりそこない奴だからお呆れないお慈悲でないか」と云って、そんなことでは駄目だ、信心を聞き直せとは云いませんでした。これで可成り思いつめたことも、青菜に塩でヘナ／＼と碎けて、もと通りに会館ですごすようになった。

れの我慢のやまぬには困ったものじや、可愛想なものじや、と懇意な人に愚痴をこぼしていますよ」と茶飲み話のように話してくれた。

その時、兄も勝手なことを云うものじや、自分には信心がないから、万事兄の云う通りに従ってきたのに我慢がやまぬとは。と、大層腹が立った。そこで会館を出て街を散歩していた時、考えさせられた。物の値段は買ひ手がつける。自分ではよくしている積りでも兄の目にはそう見えるのだから仕方がない。然しそうなれば、お前と別居しようとするのが一般の兄弟の情であるのに、困ったものじや、可愛想なものじやと愚痴まで云うのは、いつも心に思いつめているからである。マテヨ、これは不思議な人もあるものじや！となった時、この兄の言葉とおして駄目なものをお見捨てない仏様のお慈悲が知らされ、有難いなあ！と思わずつぶやいた。そのうちに、自分が兄によくしていると思っていたことが我慢であつ

このことは私の信の旅で大きな第二の気づきであった。

信を得たら立派な人間になってやりそこないようになるのじやない。相変らずやりそこないのやまぬ者をお見捨てないお慈悲一つでやらせて貰っている云々」とお話し下さった。

このことをお聞きして、もう永い年月はすぎたが、この二つの御体験は私に大きなしるべとなつて下さっている。

煩惱に覆われて真暗闇の身に、仏のおまことを聞き、闇室に電灯がついたような明るみを得て、非常によろこぶのであるが、月日が経つにつれて段々に光明にもなれて、よろこびも微温的となるが、部屋が暗い間は何も見えなかったのに、点灯によつて部屋の様子が見えはじめ、部屋の乱雑さや、塵埃も知らされ、所謂あさましさが知らされてくる。そのあまりのひどさに、我とわが身にあきれて、はじめのように喜べるようにと願つて、本を読み、お話を聞いても、そつぽを向いた心をどうすることも出来なくなる。

この時、それではいかぬでなしに「親鸞もこの不審ありうるに、唯円房おなじころにてありけり」と同座して下さつて「よろこぶべき心をおさえて喜ばせざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねて煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけり

と知られて、いよいよ頼もしくおぼゆるなり」と聖人が仰つて下さる。そこに「よろこばぬにしていよいよ往生は一定」とたのもしく仰がせていただけるのである。

唯円房にしてもはじめ聖人のお導きで不思議な本願の大悲を聞き、踊躍歡喜、手の舞い足のふむところを知らぬ歡びを恵まれたのであるが、年月を重ねていくうちに、その喜びはかすかになり、この世に執着する心の強さも見えるに及び、とうとう重病人が名医の診断をうけるように、聖人に一部始終を申し上げたのである。これが第二の気づきであった。ここにゆるぎのないたのもしさを覚えたのであった。

この第二の気づきで、わかった、心得たの心が洗われて、すっかり駄目な身と、それをかねてしろしめして下さる本願大悲の撰取不捨のたのもしさに不退転にさせて頂けるのである。無碍の白道がそこに自然にひらけてくる。

○
親鸞聖人は「建仁辛酉の西の暦、雜行を棄てて本願に帰す」と自書され、「慶しき哉、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りてまことに師教の恩厚を仰ぎ慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し」と後年にそのお慶びを述べられている。これこそ経に「聞其名号信心歡喜」のお姿である。

こうした二度の気づきは、三願転入とは全然異っていて、機の深信の徹底する有様と思う。前に述べたように、闇室に電灯がつくと、刹那に明るい部屋になるが、その喜びは感情で時と共にうすれて行く。然し、部屋に明りが射しているの、部屋の様子が明らかに見えてくる。所謂それまでは煩惱を自分の味方のように思っていたのが、その魔性が見えてくる。これは信の旅を続けて、種々な縁にふれて段々見えてくるものである。聖人が二十九歳に獲信されたのに、八十六歳の御晩年に著わされた、愚禿悲歎述懷和讃に、

浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし
虚仮不実のこの身に 浄淨の心もさらになし

悪性さらにやめがたし ころは蛇蝎の如くなり

修善も雜毒なるゆえに 虚仮の行とぞなずけたる

と、チツとも善くなった、賢くなったとは仰っていない、すっかり駄目な、それごとたわごとまことあることなき身であるとの御悲歎である。ここで、聖人は、一時的、部分的自己のことでなく、仏かねてしろしめす、我らの煩惱の全体、しかも三世にわたりかわらぬ自己の姿を自照せられているのである。

私が岡山の高生だった頃、池山先生からドイツ語を学んだが、私をふくめ友人が皆、池山先生の信徳にふれて、

その聖人が、教行信証の大切な信の巻に、「誠に知んぬ。悲しい哉、愚禿、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快まず。恥すべし傷むべし」と述べられている。ここが後年に、唯円房のおたずね「念

仏申し候えども踊躍歡喜のころおろそかに候こそ、またいそぎ浄土にまいりたく候わぬは如何にと候べきことに候うやらん」との申出に対し、「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじ心にてありけり云々」とお答え下さったことに通じる。おろそかとははじめ大きな慶びを得たのに、段々とおろそかになった、との意であり。又「親鸞もこの不審ありつるに」とは、ありたるに、と云う單なる過去でなく、所謂過去完了で、前もそうであったが、今もその通りである、との意である。ここに聖人の第二のお気づきがある、と云われる。しかもここに歎異抄九章に見るように、こうした煩惱具足の身を仏かねてしろしめして御本願を建立下されたのであるから「他力の悲願はかくの如きの我らがためなりけり」と、いよいよたのもしくおぼえる、と仰せである。これ「撰取不捨の故に正定聚に住す」とあるように、逃げる者をとらえてはなしたまぬ撰取の心光のおかげである。

○
こんな人格者の先生には今迄お会いしたことがないと、お慕いしていた。或日先生にそれを申し上げると、手を横にふられて「君方の言うような人格者ではない、一般の人とちつとも変っていない、自分の心のあさましさは手のひらの筋を見るようによく知っている」と仰つて、しばらく念仏していられた先生が「もし他人と変わっていると云えば、お念仏をいただいていることだけだよ」とつけ加えられた。その時、月光の輝くのは、太陽の光りの返照である。月には熱も光もない、という点を先生の上に知らされた。そこに心光に照護せられた先生の信徳「弥陀廻向の御名のはたらき」をはじめて身をもって教えられたことがある。

○
以上最近私自身に深く感じていることを述べたが、読者の御叱声をお願いする次第である。今日も近角先生のおのこし下さった。

またやりそこない、それだからおあきれない
お慈悲でないか

の短冊を拝しつつ禿筆をふるいました。

あ
と
が
き

二月は逃げると云いますが、もう三月に入りました。

春光のようやくしみて 初蛙
とかつての駄句を思い出しました。

○
近角先生の御講話をいただきました。我は何事も知らざることを知れりとソクラテス。知らざるを知らずとなす、これ真に知れるなりと孔子。愚禿と名告られた祖聖を仰ぎわが身を愧じ入るばかりであります。

井上様は久々に法然聖人を御讃仰いただくことになりました。十愚・愚痴の法然房と仰ったことも思い併せます。

西元様は、旧京都学生親鸞会の友と会われて思出の数々を誌して下さいました。又禰原様の一道会の記には、西元様の歎異抄の妙味について述べられたものを記録して下さいました。どうかいつまでも御健康で、御仏縁を

結んでいただきたいと祈念申し上げております。

さて「いそぎ、仏になりて」について、念仏は早作仏の法なりとあります聖語を思い併せ、煩惱具足の凡夫、出離無縁の者を速やかに仏とならせたいとの願いの一杯が念仏成仏の法であるということを想起させて貰いました。

木村様は、幸に今日までは心臓発作もなく、歎異抄のただ念仏を中心に、念仏讃仰の詩をいただきました。一月ちがいの同年輩、而も老病の私には、音信を頂く時、ホツとしております。念仏詩をとおして、あらためて歎異抄を信味させて頂きたいものであります。

『意識唯信鈔、其他三篇』の誤字
訂正のおわび

昨年七月に、今度の私の宿痾のため御心配頂いた方々に、御禮のしるしに意訳本をお読みいただきましたが、其中、後世物語のところで五十八頁の最後の行で「住坐臥が往生坐臥と誤り、続きの行で順彼仏願故が順彼岸願と間違っていました。おくれはせながら御訂正をお願い申します。

〈御案内〉

●再入院につき例会を休みます。

定	価	半	年	八〇〇円(送共)
編	集・発行人	花田正夫	電話	八二二局七〇三七番
印	刷	人	坂部光雄	愛知県西加茂郡三好町大字福谷
発	行	所	慈光社	名古屋南区駈上町二ノ八八
	振替口座	名古屋六一〇四七〇番	郵便番号	四五七